

2  
3 **モアザンヒューマンの世界における非規範的で脱主体的な倫理を考える**  
4 **マリア・プーチ・デラベヤカーサ『ケアを呼ぶもの』(Matters of Care) を手がかりとして**

5  
6  
7 伊藤 嘉高 (新潟大学)

8 **1. はじめに**

9  
10 ● **本報告の目的: Maria Puig de la Bellacasa の Matters of Care の議論を紹介しながら、ANT**  
11 **×フェミニズム科学論が社会学に対して有するインパクトを検討する。**

- 12 ▶ ANT やそれに関連する議論を科学社会学のなかに留めておくのはもったいない！  
13 ☆ 報告者の専門は地域社会学だが、ブリュノ・ラトゥールの『社会的なものを  
14 組み直す』の議論に惹かれ翻訳 (2019 年刊行) を行うなかで、科学社会学に  
15 足を踏み入れることになった。  
16 ☆ *Matters of Care* は、アクターネットワーク理論 (ANT) に対してフェミニズム  
17 科学論 (ハラウェイ、ステンゲルス、バラッド……) の視点から内在的批判を  
18 行っている。  
19 ☆ *Matters of Care* も、社会学 (広くは社会科学) そのものの方法の見直しを迫る  
20 ポテンシャルを有している。本報告で見るように、学術的実践もまた、存在論  
21 的介入であり、したがってケア実践である。その意味では、日本語で論文を書  
22 くことは依然として重要 (もちろん、英語で書かないことの言い訳にはなら  
23 ない……)。

24 ● **補足① Maria Puig de la Bellacasa について**

- 25 ▶ 日本語表記には揺らぎがあるが、今回の翻訳では「マリア・プーチ・デラベヤカー  
26 サ」にしたい (本人自身の発音を確認し、本人の希望を尊重した。スペインのカタ  
27 ルーニャ語読み)  
28 ▶ フランス語で高等教育を受ける。ブリュッセル自由大学で哲学の修士号と博士号  
29 (2004 年) を取得 (指導教員はイザベル・ステンゲルス)。2006~2008 年には UCSC  
30 (ダナ・ハラウェイを核としたフェミニズム科学論の拠点) に留学。フェミニズム  
31 流の知識政治研究に取り組み、さらには、サンドラ・ハーディングのケア論をダ  
32 ナ・ハラウェイらのフェミニズム科学論の視点から存在論的に展開。  
33 ☆ ドゥルーズらのフランス哲学の影響が大きく、英語で書かれた著作も  
34 “stretched words” (私信より) が多用されている<sup>1</sup>。  
35 ▶ 英国のレスター大学 (2010-2018)、ウォーリック大学 (2018-2023) を経て、現在

---

<sup>1</sup> その結果、訳語の選択に難儀した (している) ものとして、affirm, caring, displace, disruptive, do, engage, involve, hands-on, immediate, lively, multi-lateral, non-innocent, prolong, reclaim, reduce, specific/generic, terrain, touching, vital, with care などなど。もちろん、arrangement, assemblage, assemble, enact, configuration, possible, relationship, situated, trouble などの定番語も悩み中 (訳注による補足は不可欠。本報告の語注はこの訳注を掲載している)。

1 は UCSC 人文学部意識史学科教授。今日のフェミニズム科学論の代表的論者の一  
2 人となっている。

3 ▶ 主な著作

4 ☆ 2013, *Politiques féministes et construction des savoirs: « Penser nous devons » !*,  
5 L'Harmattan.

6 ☆ 2014, *Les savoirs situés de Sandra Harding et Donna Haraway*, L'Harmattan.

7 ☆ 2017, *Matters of care: speculative ethics in more than human worlds*, University of  
8 Minnesota Press.

9 ☆ 2021, *Reactivating Elements Chemistry, Ecology, Practice*, Duke University Press.  
10 (co-edited with Dimitris Papadopoulos)

11 ☆ 2023, *Ecological Reparation. Repair, Remediation and Resurgence in Social and*  
12 *Environmental Conflict*, Bristol University Press. (co-edited with Dimitris  
13 Papadopoulos and Maddalena Tachetti)

14 ☆ in preparation, *When the name for world is soil: Transforming human-soil affections*  
15 *across science, culture and community*.

16 ● 補足② *Matters of Care* について

17 ▶ 2017年に刊行されると、フェミニズム、STS、環境人文学などを中心に世界的に高  
18 く評価され、広範な影響を与えている（Google Scholarでは被引用回数が4,500件  
19 を超える）。

20 ▶ 学術誌の書評<sup>2</sup>で主に評価されている点

21 ① STSにおける理論的貢献（Matter of Concern から Matter of Care へ）

22 ② 従来の人間中心的な倫理を「モアザンヒューマン」へと拡張し、脱中心化。

23 ③ 非規範的な「思弁的」倫理を提唱。

24 ▶ 他方で、主にハラウェイの視点からラトウールを「内在的に」批判しているため、  
25 ハラウェイやラトウールらの議論になじみがない読者には読みづらい。そもそも  
26 文体が難解という評も。

27 ▶ 日本国内（日本語で書かれたもの）では、上記②の点については受容がなされてい  
28 るが<sup>3</sup>、学術的には鈴木和歌奈による紹介と西真如（文化人類学）による援用にと  
29 どまっている。英語圏メインで活動する研究者との分断。

30 ▶ 2024年10月より日本語翻訳中（著作権取得済み）。一通りの翻訳を終えたところ。  
31 「学部生でも読める」水準を目指す。とはいえ、まだまだ誤訳の類も多いと思われ  
32 るので、今後、訳稿検討会（後掲）を立ち上げ、2025年度内にナカニシヤ出版さ  
33 んから刊行する予定。仮邦題『ケアを呼ぶもの——モアザンヒューマンの諸世界  
34 における思弁的倫理』（←直訳）

2 ★ <https://doi.org/10.3366/soma.2020.0332>; ★ <https://doi.org/10.4000/lectures.26264>;

★ <https://lovanetwork.org/wp-content/uploads/2023/10/Matters-of-Care-Couto-Soares-89-92-Book-review.pdf>;

★ <https://www.societyandspace.org/articles/matters-of-care-by-maria-puig-de-la-bellacasa>

3 飯岡陸「批評としての《ケア》」（『美術手帖』2022年2月号）、「未来の人類に向けた想像力を育むための「フィクション」と「非規範的倫理」がもつ力：WIRED CONFERENCE 2020 レポート」（WIRED、2020年12月16日）など。

## 2. アクターネットワーク理論とは何か ——Matter of Fact から Matter of Concern へ

### ● ANT による科学的「事実」の捉え直し

- サイエンス・ウォーズ後の「批判」の危機
  - ◇ 「事実は社会的に構築される」ことを暴く「批判的アプローチ」は、「確かな科学事実などない」とする陰謀論（地球温暖化懐疑論、ポスト・トゥルース）に手を貸すことになる。
- 自然／社会二分法からの脱却をより明確化するための（社会構築主義的でない）構築主義的な概念装置が必要に。
- 科学的事実「社会的」に構築されるものでもなければ（この場合の「社会的」とは自然と対置される人間の主観的世界）、自然界に外在するものでもない。
- 科学的事実、人間と非人間（実験対象、実験器具、文書、学会など）が結びつくことで構築されるもの。「厳然たる事実」(matter of fact) は、そうした結びつきが（さまざまな翻訳によって）安定化した「結果」であり、「原因」ではない。たとえば、「微生物」として形象化されたアクターは、はじめから外在しているのではなく、さまざまな働きかけの連関（ネットワーク）の結果である。その意味で、アクター＝ネットワーク。
  - ◇ 実在か虚構かという二分法ではなく、実在のグラデーション。ネットワークが稠密であればあるほど（科学的な）実在性は高まる。
- さまざまな存在が結びつくのは、ある出来事が、さまざまな存在の「関心」(concern) を呼び集め「重要なもの」(matter)<sup>4</sup>になるから (matter of concern)。これらの関心を「うまく」結びつけることのできる知が「厳然たる事実」になる。この場合の「うまさ」はレトリックを指しているのではなく、さまざまな存在の抵抗や反論に絶えうることができるさまを指す。
  - ◇ 「集まり」としての「物／物事」(thing)。物が（社会学が対象とする）「私たち」という集合性の源泉。
  - ◇ matter of concern の訳について。『社会的なものを組み直す』の邦訳では、フランス語版の表記 (faits disputés) に従い「議論を呼ぶ事実」と訳し、「厳然たる事実」と対比させた。本書では「関心を呼ぶもの」と訳す（理由は後述）。

### ● Matter of Concern 概念の意義——情動＝関心の前景化

- ラトール自身が見出す matter of concern 概念の意義：「厳然たる事実」による支配を打破する道が開かれる。事実は組み直すことが可能。
  - ◇ 他方で、前述した「批判の危機」にも対応しなければならない。
- そこで、ラトールは、より包摂的で（さらなる分節化をもたらすことのできる）科学的事実の構築を擁護するものとして、matter of concern を位置づけ直した。ここでは、多様な存在の関心を集め、つなぐことが何よりも重視される。

<sup>4</sup> matter は、「物質＝問題」とも訳されるように、物質（もの）は客観的に存在するというよりは、問題視、重要視されることで確固として存在するようになるという含意がある。今回の翻訳では、基本的に「重要なもの」と訳すが、それは、「関心を呼ぶもの」や「ケアを呼ぶもの」とのつながりを見失わせないようにするためである。

1 ☆ ANT は、世界の真実を教えてくれる「理論」ではない。ANT とは、さまざま  
2 な存在による「よりよい」<sup>5</sup>世界の構築を促すために、舞台上上がっていない  
3 存在や連関を舞台上上げるための調査を進めるための方法（あるいは、社会  
4 学者が特権的に世界を構築しないための理論）。

5 ✓ その意味では、ANT は権力批判にも有効（非対称性をもたらしている事  
6 物の連関に目を向けさせてくれるから）。

7 ▶ 本書が見出す matter of concern 概念の意義：ラトウールは、科学的事実の構  
8 築（物政治）に関心という情動<sup>6</sup>の側面を持ち込み、科学的事実に敬意を払う（＝  
9 配慮する、ケアする）エートスを前景化した。

10 ☆ したがって、本書の邦訳では情動的側面を表すために「関心と呼ぶもの」と訳  
11 す。

### 13 3. ラトウール流の ANT の問題点 14 —Matter of Concern から Matter of Care へ

#### 16 ● 「関心と呼ぶもの」概念に対するプーチ・デラベヤカーサの疑念(第1章)

17 ▶ たとえば、ラトウールは、SUV に対して批判を繰り返す「怒れる環境活動家」  
18 を批判する。そうした活動家は「自分が正しい」という純粹無垢な立場に立ち、  
19 SUV 愛好者の「関心」を蔑ろにしてしまい、交渉することができないからだ。

20 ▶ しかし、そうした活動家を批判し、同じ舞台上立たせようとするのは、活動家を  
21 「穏健化」させることになってしまわないか？ 活動家のラディカルさこそが、そ  
22 れまで蔑ろにされてきた (neglected) 存在への気づきを促してきたとすれば、すべ  
23 での関心（懸念）をフラットに扱おうとすることで、逆にたどれなくなってしまう  
24 ものが出てこないか。

25 ▶ STS は「記述すること」にこだわり、ANT はさらなる記述のための発見装置だと  
26 言っているが、批判なく記述することは本当に可能なのか。

27 ▶ 特定の「争点」(issue) が立ち上がる以前から、常にすでに行われている、しばし  
28 ば声なく、不可視化された実践に目を向ける必要がある。そうした実践を「ケア」  
29 として捉えてきたフェミニズムによる批判的実践が重要に！

#### 30 ● プーチ・デラベヤカーサが「ともに考える」フェミニズムの知見

31 ▶ ジョアン・トロントらのケアの定義

32 「ケアとは、「私たちの世界」を維持し、継続させ、修復し、そのなかでできる限  
33 りよく生きられるようにするために、私たちが行うあらゆることであり、……この  
34 世界には、私たちの身体、私たち自身、私たちの環境があり、私たちは、それら  
35 すべてを生を支える複雑な網の目のなかに織り込もうとしている」(強調はプーチ・デ  
36 ラベヤカーサ)

---

<sup>5</sup> 「よりよさ」は、その存在様態（科学なのか法なのか道徳なのかフィクションなのか宗教なのか……）  
によって異なる。

<sup>6</sup> プーチ・デラベヤカーサは、「情動」の語を、情動論的転回を意識しつつも、一般的な「感情」（関心や  
懸念、愛情や情愛、不安など）の意味も含めて用いている。

- 1            ☆ ケアは、「労働・実践」と「情動・感情」（気遣うこと）と「倫理・政治」（で  
2            きる限りよい生を求めること）が一体になった複合的な営み。
- 3            ☆ さらに、本書では、これを現状の秩序を攪乱させる（disruptive な）ものとし  
4            て捉え返す<sup>7</sup>。つまり、これらの三枚絵（triptych）は、不可欠な結びつきであ  
5            るとされながらも、ときとして緊張をはらんだ関係にある。たとえば、女性の  
6            抑圧をもたらすケア労働。燃え尽き症候群をもたらすケア労働。
- 7            ▶ ハーディングやヒラリー・ローズらのスタンディング理論
- 8            ☆ 社会的に周縁化された立場（例：女性のケア労働の経験）から世界を見るこ  
9            とで、支配的な視点からは見えなかった現実の側面や権力関係が明らかにな  
10            る。ただし、本書では認識論のレベルにとどまることなく、さらに存在論的<sup>8</sup>  
11            に拡張される。
- 12           ▶ スーザン・リー・スターらの生態学的な STS 研究
- 13           ☆ 異質な要素からなるシステムを円滑に機能させるために不可欠でありながら、  
14           しばしば認識も評価もされない調整・連携の労働への注意を喚起。
- 15           ▶ ナターシャ・マイヤーズや鈴木和歌奈ら科学人類学による実験室研究
- 16           ☆ 実験室における知識生産そのものに情動やケアが関与していることを明らか  
17           にしてきた。
- 18           ● ケアの視点からのラトゥール批判
- 19           ▶ 「関心と呼ぶもの」という見方をとることで、非人間を含むさまざまなアクター  
20           を「民主的な集会」に招き入れることができるようになるが、その集会が成り立つ  
21           ために誰が「見えないケア労働」を担い、誰が不均衡な「苦しみ」を強いられてい  
22           るのか、という問いを十分に立てることができない。
- 23           ▶ ラトゥールは、「権力」や「構造」といった説明を「出来合いの批判」として退け  
24           るが、その副作用として、植民地主義や家父長制といった「不快な歴史」を忘却す  
25           る危険を伴う。
- 26           ☆ （報告者注：ただし、ラトゥールは「植民地主義」や「家父長制」といった用  
27           語の利用を禁じてはいない。そうした概念の有効性——人びとに気づきを与  
28           えてくれる——も否定していない。ラトゥールが問題にしているのは、研究者  
29           が批判のためにそうした概念を持ちだしても、何（どの連関）を変えればよい  
30           のかが分からないということの問題にしているだけである）。
- 31           ● 「ケアと呼ぶもの」へ
- 32           ▶ 「関心と呼ぶもの」には「ケア」が必要。つまり、「ケアと呼ぶもの」(matter of care)  
33           である。さらには、そうしたケアを担う存在にもまたケアが必要。

<sup>7</sup> 攪乱（disruption）は、既存の確立された秩序、規範、あるいは支配的な思考様式を、内側から揺るがしたり、中断させたりすることで、新たな視点や変革の可能性を開く作用を指す。単なる否定や破壊ではなく、現状を問い直し、別のあり方を模索する動きを伴う。たとえば、ジュディス・バトラーは、セックス／ジェンダーの二分法のような枠組みを、その内部での実践（ジェンダー規範をあえて模倣するドラッグ・パフォーマンスなど）を通じて「攪乱」し、その固定性を解体しようとする。

<sup>8</sup> ここでの存在論（ontology）は、存在そのものの根拠を問う伝統的学問を指しているのではなく、存在の根拠、とりわけ、「関係」によってある存在が構築されていく動きを指している。同様の用例はラトゥールの『社会的なものを組み直す』などでも見られるが、ラトゥールの場合は、「関係」ではなく「連関」の語を用いる。



従うのかを考えたとき、声を上げてくれるアクターに従うほかない。「声を上げなくても痕跡はあるはずだ」とラトゥールは言うが、研究者はどこまでその痕跡に目を向けることができるのか。

- ▶ 結局のところ、記述は ANT 論者の関心に左右されてしまうのではないか。ラトゥールによる SUV の議論において、交通弱者は登場しない（ラトゥールの関心にはないから）。
- ▶ ある存在を抑圧（不可視化）するかたちで、ある事実を成り立たせる（アクター＝ネットワークを安定化させる）こともできる。翻訳が上手くいく／いかないという事態だけを問題にしているはいけない。
- 社会学者は、単にネットワークを記述する「記述者」や、世界を組み合わせる「外交官」にとどまっていはいけない。そうした営みは、ある存在の不可視化に手を貸す権力性をはらんでいる。調査研究という営みそのものが、ある関係を育み、そのことで別の関係を損なう「介入」であることを認め、いかなる関係を育もうとしているのかを明示しなければならない。

1

## 2 4. Matter of Care と社会学

### 3 ——— 綺麗事では済まない「ケアしながら考える」こと

4

#### 5 ● 「ケアしながら考える」とは何か？—知識生産の存在論的転回(第 2 章)

6 ▶ 「ケアを呼ぶもの」という視座によって、私たちの記述や思考は「ケアしながら考  
7 えること」へと変わる。

8 ▶ ハラウェイに依拠するならば、思考や知識生産は、孤立した個人の頭のなかで行  
9 われるのではなく、常に他者（人間・非人間）との（物質的）「関係」の網の目の  
10 なかで、その網の目を維持し、修復し、さらに織りなしていく営み。

11 ☆ 私たちは関わりあうことで考えること（＝関わりあわないことで考えないこ  
12 と）ができるのであって、この意味で思考は常に関係をケアする世界制作的  
13 な実践である。

14 ☆ 「ケアしながら考える」ことは、規範的な要請ではなく、存在論的な事実。

#### 15 ● ダナ・ハラウェイの知的資源

16 ▶ 関係論的存在論：「存在は、関わりあい先立って存在するのではない」。モノも人  
17 間も、関係性のなかで相互依存的に生成される。

18 ▶ 状況に根ざした知：あらゆる知識は、特定の場所、身体、歴史（つまりは、関わり  
19 あい）から生まれる「部分的」なものであり、客観性を装う「どこでもない場所か  
20 らの視点」は存在しない。

21 ☆ 「状況に根ざした知」は、単なる限界ではなく、むしろ自らの視点の部分性  
22 を自覚し、その知識がもたらす帰結に責任を負うという、倫理的な姿勢を研  
23 究者に要求する。

24 ▶ 記号論的技術：言葉、理論、物語といった私たちの思考の道具は、物質性に根ざし  
25 ているとともに、単なる記述のツールではなく、現実を形作り、物質的な帰結をも  
26 たらす強力な物質記号的な「テクノロジー」である。

- 1            ☆ **物質記号論**:物質があって記号が付与されるのでもなければ、記号が自由に物  
2            質化しているのでもなく、物質と記号は不可分に絡み合っている。
- 3            ☆ したがって、どのような言葉を選び、どのような物語を語るかという選択は、  
4            単なる学術的な問題ではなく、世界をどう作り変えていくかという、きわめ  
5            て倫理的・政治的な行為。
- 6            ▶ **応答能力(response-ability)**:知識生産において重要なことは、自らの知が世界  
7            にどう作用するのかを把握し、その反応に応答するスキルと感受性をもつことで、  
8            その責任を引き受けること。
- 9            ▶ **綺麗事では済まないケア**:ケアを規範的な道徳として位置づけると、既存のヘゲモ  
10            ニーの維持に手を貸したり、独善的なものになったりしかねない。
- 11            ☆ むしろ、「厄介な問題を抱えたままにいる」(staying with trouble) ための作法  
12            としてケアはある。
- 13            ● **ハラウェイとともに「ケアしながら考える」ための 3 つの手立て**
- 14            ▶ **ともに考える(Thinking-With)**
- 15            ☆ 思考は決して一人では行われぬという事実を認識し、自らの思考が依拠し  
16            ている他者(研究者、学生、友人、さらには愛犬や技術などの非人間)とのつ  
17            ながり(親族関係 kinship、姻戚関係 alliance)を積極的に育み、自らのテク  
18            ストに積極的に登場させる。
- 19            ☆ ハラウェイの込み入った引用スタイルに代表されるように、個人の独創性を  
20            際立たせるのではなく、知の集合的な網の目を可視化する。サイボーグと女  
21            神を結びつけるように、安易なカテゴリー化(純化)を拒否し、科学/宗教、  
22            人工/自然といった既存の二元論的カテゴリーを攪乱する。
- 23            ▶ **内なる異を唱える(Dissenting-Within)**
- 24            ☆ ケアとは、対立のない調和を目指すことではない。むしろ、自分が属する共  
25            同体や依拠する思想(フェミニズムや科学など)の内部に留まり、その問題  
26            点や矛盾から目をそらさず、そこから新たな可能性を模索し続ける(例:スタ  
27            ンドポイント理論の存在論的な読み替え)。
- 28            ☆ 外部から安全に批判する「批判のゼウス」になるのではなく、自らの加担や  
29            共犯性をも引き受けながら、情愛と責任をもって、傷つきやすさ(vulnerability)  
30            も伴いながら、内部から変革を試みる。「他者を笑う」のではなく、「他者と  
31            ともに(自嘲的に)笑う」(「サイボーグ宣言」でのハラウェイのユーモアや  
32            アイロニー)。
- 33            ▶ **代わりに考える(Thinking-For)**
- 34            ☆ 周縁化・抑圧された者の視点に立つことを試み、そこから自らの属する世界  
35            を問い直すこと。ただし、その経験を安易に「代弁」したり、ロマン主義的に  
36            理想化したりする「流用/我有化」の危険性を常に自覚することが必要。
- 37            ☆ これらの危険性を回避するためにも、「代わりに考える」という知的実践は、  
38            最終的に「ともに生きる」という物質的・倫理的な関係性へと接続される。
- 39            ✓ ハラウェイが実験用マウスであるオンコマウス™を、単なる研究対象で  
40            はなく、苦しみを共有する「姉妹」として捉え直したように、「代わりに  
41            考える」実践は、その対象となる存在の「生」に具体的な影響を及ぼす

1 ことへの応答能力＝責任を引き受けることを迫る。

- 2 ✓ さらに、ハラウェイが愛犬カイエンヌとの関係を通して示したように、  
3 「ともに生きる」ことは、私たち自身をも変容させる、厄介で、しかし  
4 避けては通れない関わりあいである。

#### 6 以上の議論から考えられるかもしれない社会学の展開可能性

- 7 ● 「ケアしながら考える」という姿勢は、ANT の「アクターにしたがって記述する」と  
8 という方法論に、さらなる倫理性と政治性を与える。視野狭大なアリにとどまることは許  
9 されず、「誰のために、どのように記述するのか」を常に自問しなければならない。
- 10 ● そこで必要となるのは、部外者的な「再帰性」ではなく、むしろ自らを内部に位置づけ  
11 る「共犯性」。繰り返しになるが、ANT 流の社会学の「記述」は、単にアクター（人間  
12 と非人間）にさらなる連関を促すためのアクターではなく、それ自体が、世界を形作る  
13 「介入」の営みであり、関係性を築き、あるいは破壊する力を持つ「テクノロジー」と  
14 して捉え直す必要がある。
- 15 ● ANT が目指すのは、神の視点による「客観性」ではなく、さまざまな存在の連関によ  
16 るさらなる分節化を促すことで達せられていく客観性の深化であった。しかし、それは  
17 必ずしも、すべての生にとって「できる限りよい」世界を実現するものであるとは限ら  
18 ない。自らの記述が促そうとする世界制作とそのなかで生きる他者たちに対する応答  
19 能力＝責任が求められる。

## 21 5. 回折をもたらす社会学へ——「触れるビジョン」(Touching Vision)

### 23 ● 認識論的＝存在論的問い——いかに「見る」か、いかに「触れる」か(第3章)

- 24 ▶ 私たちは、世界といかに関わりあいながら記述することができるのか。とりわけ、  
25 見過ごされてきた存在にいかに向き合うことができるのか。そこで触覚の可能性  
26 に着目する。

#### 27 ▶ 前提① 視覚(Vision)中心主義への批判

- 28 ☆ 伝統的な科学や哲学において、「見る」ことは、客観的で、距離を置いた、対  
29 象を支配する知のメタファーであった(ハラウェイの言う「神のトリック」)。  
30 ☆ フェミニズム科学論は、この「遠隔的な視線」が、いかにして対象(特に身体)  
31 を客体化し、非政治化してきたかを批判してきた。

#### 32 ▶ 前提② 触覚(Touch)への注目

- 33 ☆ 近年の STS では、身体的で、近接し、内部作用的で、情動を伴う知のあり方  
34 として「触覚的(ハプティック)なもの」が注目されている。

- 35 ✓ ただし、haptic は「触覚的」と訳されるが、狭い意味での触覚を指すので  
36 はなく、視覚、聴覚、味覚、嗅覚以外の身体感覚を指す。たとえば、物を  
37 動かすときに感じられるような筋肉や関節の運動感覚も含まれる<sup>10</sup>。

<sup>10</sup> たとえば、マイヤーズは、細胞動画に合わせて自分の体が動かしてしまう細胞生物学者の実践を取り上げて、実際に対象に触れているかのような身体感覚(そこには情動も伴う)を通して新たな洞察が生み出されていくプロセスを「触覚的」(身体感覚に根ざした)創造性と呼んでいる。科学的知識は視覚に依拠

- 1            ☆ ケアの営みが持つ「関わりあい」(involvement) という性質は、この「触覚」  
2            のメタファーと強く響きあう。
- 3 ● 触れることの両義性—触れあうことは綺麗事にとどまらない
- 4            ▶ 触覚がもたらしてくれるとされるもの——可逆性・近接性・有限性
- 5            ☆ 可逆性(reversibility): 「触れることは、触れられることである」という触  
6            覚の基本的な性質は、知る者(主体)と知られるもの(客体)の二元論を根底  
7            から揺るがす。研究者は、対象に影響を与えるだけでなく、対象からも影響を  
8            受け、相互変容する。ただし……。
- 9            ☆ 近接性: 触覚は、抽象的な理論化から離れ、対象との直接的かつ具体的で、身  
10            体化された、生々しい関わり合いを約束してくれるように見える(←実際には他者性は解消されない)。
- 11            ☆ 有限性: 死が避けられず、不完全で傷つきやすい肉体を有していることへの自  
12            覚。生きることの困難さであるとともに生きる条件。
- 13            ▶ 触覚の危険——我有化と無媒介性幻想
- 14            ☆ 暴力と我有化: 触れることは、押し付けがましく、暴力的な「侵入」や、他者  
15            の経験を「流用する」行為にもなりうる。触れることは、ケアに満ちているわ  
16            けではない。
- 17            ☆ 無媒介性幻想→効率性概念の強化: 特に現代の触覚テクノロジーのマーケテ  
18            ィングは、「リアルな」体験との「直接的/即時的」つながりを喧伝してい  
19            る(人間の「主体性」の強化!)。しかし、これは、その裏にある複雑な技術  
20            的・社会的「媒介」(発展途上国の労働者の身体の消耗など)を覆い隠す幻想  
21            にすぎない。
- 22            ✓ 触覚テクノロジーによる「新たなつながりは実際には距離を縮めない。  
23            距離を再分配する」(p.109)。
- 24            ● 触覚から生まれるビジョン——触れるビジョン
- 25            ▶ ビジョンを捨てるのではなく、「触れる」ことに根ざしたビジョン(見ること=触  
26            れること)へと「温め直す」。
- 27            ☆ 対象との近接性を保ちながら、対象に与える自らの影響を自覚し(触れるこ  
28            とは世界制作)、その種差性・物質性に注意深くある知のあり方。「現実とは、  
29            内部作用的(intra-active)な触れあいのプロセスに他ならない」(p.114)。
- 30            ✓ カスタネダのロボティック・スキン(Castañeda 2001)<sup>11</sup>。
- 31            ✓ バラッドの走査型トンネル顕微鏡(Barad 2007=2024)<sup>12</sup>。
- 32

---

した観察によってのみ構築されるものではない(Myers 2008, 2015)。

<sup>11</sup> カスタネダが注目する「ブッシュ」型ロボットの皮膚は、外界からの刺激に対して、何が自らを破壊しうる有害なものかを識別することを学ぶ警戒システムとして機能する。ここでの触覚は、世界を意のままに操るための直接的なアクセス手段ではなく、時間をかけて他者との適切な関わり方を学んでいく繊細で試行錯誤に満ちたプロセスとしてある。

<sup>12</sup> バラッドの取り上げる走査型トンネル顕微鏡(STM)は、非常に細い針(深針)で対象の表面を原子数個分という極めて近い距離でなぞることで(走査)、その凹凸構造を計測し、コンピュータ上で画像化する顕微鏡。具体的には、探針と対象の間に電圧をかけておくと、実際には接触していなくても、量子力学的な現象である「トンネル効果」によって、両者の間に微小な電流(トンネル電流)が流れ、このトンネル電流の大きさは、探針と対象表面との距離に非常に敏感に変化するために、凹凸の検出が可能になる。ここでは、対象表面の原子配列や電子状態がトンネル電流の大きさを決定し、その情報が探針を介してフ

- 1 ▶ 触れることに根ざした知は、綺麗事では済まない関係性のなかで、他者との出会いがもたらす喜びと義務の両方を引き受ける。目指すべきは、対象との完全な「融合」でも、冷徹な「距離」でもなく、「エロ的な揺れ動き」(ローラ・マークス)。
- 2
- 3
- 4 ☆ 触覚的な視覚性がもたらす「他者の不可知性」(近接画像が生み出すぼやけた
- 5 形象)。
- 6 ▶ 触れることの「可逆性」は、個人間の対称的な交換(ギブアンドテイク)ではなく、
- 7 非対称的で集合的な網の目の中で循環する「互酬性」を呼び起こす。
- 8 ☆ ハラウェイ「犬に触れるとき、私は誰や何に触れているのか」→目の前の犬
- 9 の身体に触れているだけではない。犬の身体は、無数の関係が交差し物質的
- 10 に絡み合った「結節点」<sup>13</sup>。触れることで、触れあいによる構築の連鎖に加わ
- 11 る。
- 12 ▶ 一つの「接触」によって、その対象が埋め込まれている、人間と非人間からなる広
- 13 大で、すでに存在している「ケアの生きた網の目」が知覚される。
- 14 ☆ ケアの互酬性は、単純な一対一の交換にはとどまらない。「ケアの生きた網の
- 15 目は、個々人が与えたり返されたりすることで維持されるのではなく、集合
- 16 的で散開した力によって維持される」(p.120)。ケアをもたらすエージェンシー
- 17 は多存在間に広がっている。
- 18 ▶ 私たちの倫理的責任は、個々の対象への「お返し」に留まらず、この人間と非人間
- 19 が織りなす、多者間に広がるケアの循環そのものに貢献することへと拡張される。
- 20 ▶ 〈触れるビジョン〉は、理想像をそのまま「反射」したビジョンではなく、「あり
- 21 ふれているが、見過ごされてきた日常性」に光を当て重ね合わせ、干渉を起こすこ
- 22 とで、これまでとは異なる知の「パタン」を生成(回折 diffraction)するビジョン。
- 23 ☆ 壮大な出来事ではなく、生を支える、ありふれているが、見過ごされてきた
- 24 日常性と結びついた手触りのある営みに根ざしながら、「ありうる別の世界」
- 25 に向かうビジョン。
- 26 ☆ これにより、物質性から遊離したバーチャルな(未来の)可能性——テクノロジー
- 27 による内在的な触れあいの約束——に抗する。
- 28

#### 29 以上の議論から考えられるかもしれない社会学の展開可能性

- 30 ● 「触れるビジョン」という構想によって、盲目的なアリであるはずの ANT 流の社会学
- 31 者もまた、視覚的・遠隔的な知のあり方の典型例として位置づけられることになる。
- 32 ● 研究者の責任は、個々の調査対象者との二者関係にとどまらない。「触れるビジョン」
- 33 は、単に研究対象をケアするという態度を意味するのではなく、自らの「接触」を通じ
- 34 て、ケアのエージェンシーが研究者という人間主体から、人間と非人間が織りなす広
- 35 大な「生を支える網の目」全体へと脱中心化されていくプロセスの上に成り立つ。「触れ
- 36 るビジョン」は、そうした非対称的で集合的な互酬性の環に責任をもって関わりあって
- 37 いく倫理的・政治的実践のビジョンである。
- 38 ● 社会学の目的の一つである「私たちの構築」を促すことは、本書の議論では、決して綺

イードバックされているため、観察者による働きかけに対象が直接応答していると言える。

<sup>13</sup> 家畜化の数千年にわたる歴史、ペット産業などの巨大な経済システム、コンパニオン・アニマルの思想、犬とともに暮らすことの生態学的な影響(食料、排泄物など)。

1 麗事では済まない「多存在間に広がる相互依存的なケア関係の構築」を促すことである  
2 といえるだろう。

- 3 ● 社会学の研究倫理は、個人主義的なモデル（調査協力者個人の権利保護など）から、生  
4 態学的で集合的なモデルへと根本的に捉え直すことが求められる。それは、研究行為が  
5 「ケアの生きた網の目」にもたらす影響を考慮するモデルである。たとえば、あるコミ  
6 ュニティの研究が、そのコミュニティ内の既存の権力関係やケアの分担をどう変容さ  
7 せてしまうのか、といった問いが倫理的検討の中心となる。

## 9 6. 社会学と生態学的倫理—パーマカルチャーと土壌科学

- 11 ● ケアの視点を取り入れた ANT 流の社会学は、現代社会における自然文化<sup>14</sup>  
12 (naturecultures)とどう関わりあうことができるか。

- 13 ▶ 本書では、二つの具体的な事例——パーマカルチャーの実践と土壌科学の転換  
14 ——において「ケアを呼ぶもの」の実際をみることで、ケアが、いかにして人間中  
15 心的な世界観を揺るがし、人間と非人間が織りなす「もうひとつの生政治」  
16 (Alterbiopolitics)をもたらしうるのかが論じられる。

- 17 ▶ 近代においては、多くの場合、自然を人間のための「資源」とみなし、そこからい  
18 かに効率よく価値を「収奪」するかという生産至上主義の論理に支配されてきた。

- 19 ▶ プーチ・デラベヤカーサは、この収奪的な論理に代わる、より公正で持続可能な関  
20 係性を模索する。そのための鍵が、土にまみれた具体的な実践のなかに埋め込ま  
21 れた、人間と非人間との多存在間に広がる相互依存的な（非生産的だとされる）ケ  
22 ア関係を「内側から」思弁的に生み出し続けていくこと、それによって「ともに生  
23 きていくこと」である。

- 24 ● 事例① パーマカルチャーにおける「倫理的な営み」(第4章)

- 25 ▶ パーマカルチャー:「地球をケアし、人びとをケアし、余ったものを還す」という三  
26 つの原則を掲げる、生態学的なデザイン思想であり、世界的な実践運動。

- 27 ▶ 本書の視座

- 28 ☆ 非規範的な倫理:パーマカルチャーは、普遍的な道德律ではなく、具体的な場  
29 所や生態系との関わりの中かで生まれる「倫理的な営み」(ethical doings)。そ  
30 の基本姿勢は「状況次第 (It depends)」という言葉に集約され、常に状況に  
31 応じた判断が求められる (cf. アネマリー・モルのケアのロジック)。

- 32 ✓ 形式化した倫理審査や、倫理的責任を個人の選択に帰属させる、脱政治  
33 化した「ヘゲモニックな倫理」(倫理的な言葉だけの氾濫)との対比。

- 34 ☆ 脱中心化されたエージェンシー:ここでは、人間は自然を管理する「主人」では

<sup>14</sup> 自然文化 (naturecultures) は、自然と文化の二分法 (たとえば、「客観的、客体的な単一の自然」と「主観的、主体的な複数の文化」の二分法) を超え、これまで自然とされてきたもの、文化とされてきたものが渾然一体となってそれぞれの世界が織りなされているさまを捉えようとする概念である。たとえば、人間と犬の今日の関係は、人間が狩りのパートナーや番犬が欲しくて狼を手懐けた結果なのかもしれないが、ハラウェイが論じているように、実際には人間による一方的な関係ではなく、互いに影響を与え合い相互に変化しあった結果として生まれた共生関係である (犬によって狩猟や牧畜のあり方が変わり、犬もまた人間の残飯からデンプンを消化できるように遺伝的適応をした形跡がある)。

1 なく、「自然の働き」と捉えられる。ミミズや微生物、水や大気もまた、世界  
2 を維持するケアのエージェンシーを発揮するアクター（ケアを呼ぶもの）で  
3 ある。

4 ✓ ただし、その結果として、人間が非人間的（人間も動物と同じ）になる  
5 のではない。倫理的義務はこの生の網の目の具体的な物質的絡み合いの  
6 中から内在的に生じていく。つまり、純粋に功利主義的（それが必要だ  
7 からケアする）でも、純粋に利他的（そのために自己を犠牲にする）で  
8 もなく、生の網の目を豊かにしていくために余剰を還元することが不可  
9 欠であるという物質的な制約（ステンゲルス「偶有的な必然」）から生じ  
10 える。

11 ☆ もうひとつの生政治(Alterbiopolitics):個々の生や身体の管理・陶冶では  
12 なく、人間にとどまらない<sup>15</sup>生の共同体としての「ビオス」へと「私たち」を  
13 帰属させていく政治。

14 ✓ 「私的」とされる個人の庭での堆肥作りは、実際には集合的な実践。そ  
15 こでは、古代ギリシア以来の公／私の二元論・階層論が解体される。

16 ✓ フーコー流の生政治が人間個人の「ビオス」を対象としていることとの  
17 対比。

## 18 ● 事例② 土壌科学における「ケアの時間」の発見(第5章)

19 ▶ 生産至上主義の時間性:土壌科学は、土壌を、作物を育てるための単なる「受け皿」  
20 や「資源」と見なし、いかに早く、多く収穫するかという直線的で未来志向の「生  
21 産の時間」に従属させ、進歩的・短期的・加速的な科学的解決の対象にしてきた  
22 (「未来を約束する科学」 promissory science)。

23 ☆ しかし、科学的解決は次なる未来への危機をもたらし（常なる予期的不安）、  
24 それがさらなる加速的な介入を正当化していく。危機をもたらした論理を危  
25 機が強化していくフィードバックループ。

26 ✓ 例:緑の革命に対するヴァンダナ・シヴァの批判:生物多様性の喪失、水  
27 資源の枯渇、ローカル・ナレッジの破壊、農民の負債増大。

28 ✓ 「収穫量を増やして土壌をさらに疲弊させるか、世界を飢えさせるか」  
29 という「地獄のような」二者択一（ステンゲルス）

30 ▶ 本書の視座:そうした生産至上主義を告発するのではなく、土壌を受動化させる支  
31 配的な関係性を内部から変容させる可能性を有する日常的な土壌ケアの実践に思  
32 弁的に関与し、土壌を「ケアを呼ぶもの」に変換させる。

33 ▶ 生態系サービス論:土壌の価値を、食料生産だけでなく、水質浄化、炭素貯蔵、精  
34 神的充足といった多様な「機能」や「サービス」にも見出そうとする試み。

35 ☆ 土壌の価値を多様化してはいるものの、あくまで人間のために一方的に奉仕  
36 する生態系として捉えられている。

---

<sup>15</sup> 人間にとどまらないないしモア・ザン・ヒューマン (more than human) は、人類学や環境学などの分野で用いられ、従来の人間中心的な視点に収まらない事態を指す。すなわち、人間が主体的に世界を構成しているのではなく、非人間（動物、植物、テクノロジーなど）もまた重要なエージェンツであり、人間や非人間のさまざまな存在の相互作用、相互依存、共進化などによって、さまざまな世界が構築されているさまを指す。「人間にとどまらない」という訳語を佐々木寛和氏に教示いただいた。

- 1                   ✓ 自然から人間への一方向の流れを想定する「サービス」に対して、多方向  
2                   向に多存在間に広がる義務と貢献の関係を前提とする「ケア」へ。
- 3           ➤ 近年の土壌科学の内部では、生物学が中心的な役割を担うようになり、土壌を単  
4           なる物質ではなく、多様な生物が相互に依存しあう「生きている世界」として捉える  
5           動きが広がっている。「生物が土壌である」。
- 6           ✧ **食物網モデル**:土壌がバクテリア、菌類、ミミズなどが織りなす複雑な生の共  
7           同体である。そのなかでは、ミミズの時間があり、微生物の時間があり、植物  
8           の時間があり、ウサギの時間があり、人間の時間があり、それぞれが異なる  
9           時間性を有する。生産至上主義の時間に従属させるのではなく、それぞれの  
10           固有の時間尺度を尊重することが求められる。
- 11           ✓ 本書では、このモデルをケアの視点から読み解き直す。食物網は「食べて、  
12           食べられる」という、身体的で生々しく、時には不快でさえある生の  
13           循環の形象であり、人間もまたこの網の目の一員にすぎない。ここから、  
14           新たな倫理的、情動的な「分かちがたい結びつき」が生まれている。
- 15           ✧ **エレイン・インガム(土壌微生物学者)**:中古の顕微鏡やリンゴの芯抜き器といっ  
16           た身近な道具を使って、土壌中の微生物を自らの目で観察するなどして、土  
17           壌に対する感受性を「時間をかけて」育てていくことを推奨。
- 18           ✓ これらは、非効率で時代遅れなノスタルジーではなく、歴としたイノベー  
19           ション。ただし、過去との断絶から生まれる「進歩」(evolution)では  
20           なく、既存の関係性の網の目を内側に深化させていく「巻き込み」  
21           (involution)。
- 22           ✓ (報告者注:もちろん、インボリューションにも両義性はあるだろう。)
- 23           ➤ この「生きている土壌」をケアするためには、生産至上主義の時間とは異なる「ケ  
24           アの時間」をつくる必要がある。性急な介入を控え、じっくりと待ちながら「思慮  
25           深く、長期にわたる観察」を行う。
- 26           ✧ さまざまな生が関わりあう「ケアの時間」を前景化することは、技術科学が  
27           押し進める生産主義・加速主義的な時間性を内側から攪乱する力を持つ。技  
28           術科学の力を認めつつも、生産という単一の直線的時間性から脱却させ、多  
29           様な生態学的時間性のなかに位置づけることが重要。
- 30           ✓ 「期待か破滅かという未来をめぐる英雄的なビジョンは、結局のところ、  
31           自らの生活基盤を他の誰かのケアに委ねている人々にだけ許された支配  
32           的な視点なのではないか」(p.208)。
- 33           ✧ 結果として「ミミズもまたケアをしている」という「擬人化」がなされるが  
34           (他者性の抹消!?)、それは、非人間を単なる受動的な「資源」や「機能」  
35           として語る支配的な物語(たとえば、「土壌エンジニア」としてのミミズ)に  
36           対抗し、オルタナティブな関係性を想像するための「寓話創作」(fabulation)。  
37           ミミズは人間を助けようと「意図」してはいないかもしれないが、人間の排泄  
38           物を分解し、土壌を豊かにするという、ケアの「営み」を担っている。この事  
39           実に着目することで、主観的な意図を問う袋小路を回避する。
- 40  
41

## 1 以上の議論から考えられるかもしれない社会学の展開可能性

- 2 ● ケアの視点を持つことで、社会学者は、支配的なシステムの内部にすでに萌芽として存在している「もうひとつの存在論 (alter-ontology)」、すなわち、これまでとは異なる  
3 「人間にとどまらない」 (more than human) 関係性のあり方を発見し、記述する方向  
4 へと進む。
- 5 ● ANT の生態学的拡張：ANT は非人間を「アクター」としてフラットに扱い連関・翻訳  
6 の成否をたどるのではなく、その種差的な物質性や、固有の時間性 (生態学的な厚み)  
7 に注意を払うべきである。そのためには、論文生産の圧力に抗い、研究対象との持続的  
8 な関係のために「時間をつくっていく」ことが求められる。

## 11 7. まとめ——ラトゥールの存在様態論との比較検討 (当日は省略する予定)

### 13 ● まとめ——本書から得られる示唆

- 14 ▶ ANT の批判的・思弁的継承：プーチ・デラベヤカーサは、ラトゥールの「関心と呼  
15 ぶもの」に、フェミニズムのケア倫理とスタンドポイント理論を接ぎ木する。これ  
16 により、権力の非対称性や見過ごされた労働を可視化する「批判的な厚み」を加  
17 え、支配的な論理を内側から攪乱し、新たなケア関係構築の可能性を開いている。  
18 ☆ ANT の「アクターに従う」という方法論的原則は、「どの (声なき) アクター  
19 に、いかにして従うのか」という倫理的・政治的な問いへと深められる。
- 20 ☆ 「関心と呼ぶもの」は、それ自身がケアを必要とし、ケアによってその政治性  
21 が問い直されていく「ケアと呼ぶもの」として再構築される。
- 22 ▶ 新たな研究者のエートス—応答能力と触れるビジョン：ANT 流の社会学者もまた、  
23 単なる記述者ではなく、自らの研究が世界制作に与していることを自覚し、その帰  
24 結に対して応答責任を負う倫理的・政治的实践者となる。求められるのは、規範を  
25 示すことではなく、「ありえたかもしれない別の世界」を探る「思弁的」な思考を、  
26 ケアの実践として引き受けることである。
- 27 ☆ その認識論的=存在論的方法として、「触れるビジョン」がある。「触れあい」  
28 がもたらす脱人間中心的なケアの循環を記述し、人間以外の存在が果たして  
29 いるケアの働きを可視化し、その集合的な網の目に対する応答責任を引き受  
30 ける。
- 31 ▶ 思弁的倫理の政治的地平：この知のあり方の転換によって、支配的な生産至上主義  
32 の論理の内部にすでに萌芽として存在する「もうひとつの存在論」を探求し培うこ  
33 とも可能になる。
- 34 ☆ そこでは、技術科学の「加速の時間」に抗い、生態学的な関係性を育むための  
35 維持や修復といった「ケアの時間」を研究実践の内に確保することも必要と  
36 なる (短期成果主義に抗う！)。
- 37 ☆ 研究という営みは、世界への倫理的介入、すなわち「思弁的倫理」の実践であ  
38 る。普遍的な規範を提示するのではなく、それぞれの状況で「いかにケアす  
39 るのか」と問い続け、できる限りよい (生きやすい) 世界を、人間と非人間が  
40 ともに探求し、制作していこうとする知のあり方。

1 ● ラトゥールの存在様態論との比較検討

2 ▶ ラトゥール自身も、自身の ANT が、さまざまなネットワークを均質化しており、  
3 その多様性を捉え切れていないこと、その結果として、特定のネットワークが無限  
4 定に拡張していくことの問題に応答する→存在様態論へ。

5 ▶ **存在様態論**:近代の根本的な過ちは、科学という一つの様態を、他のすべての様態  
6 (法、政治、宗教、道徳など)を裁定するための普遍的な基準と見なし、他の様態  
7 を科学の言語で語ろうとした点にある。これにより、他の様態の固有の価値や真  
8 理が「非合理的」あるいは「虚偽」として退けられ、世界の豊かさが著しく損なわ  
9 れてきた。

10 ☆ ある存在様態の適切性条件を別の存在様態に当てはめてしまうカテゴリー・  
11 ミステイクを防ぐために、存在様態を析出し、異なる様態間の健全な関係を  
12 築くための交渉(外交)を求める。

13 ▶ **道徳の存在様態の適切性条件**:普遍的な規範や規則の体系ではなく、核心は、ある  
14 存在や行為を「善いもの」と「悪いもの」へと絶えず再評価し、その価値を再配置  
15 していく運動←「善悪の遍歴」(traversal of good and evil)。

16 ☆ 善と悪を完全に「分離」することを目指すのではなく、むしろ両者の間を絶  
17 えず移行し、交渉し、時には反転さえする可能性を常に開く。

18 ☆ 「分かちがいた結びつき」(attachment):私たちが何を善とし、何を悪とす  
19 るかは、私たちが何を大切にし、何を手放したくないかと結びついている。

20 ▶ 「参照の連鎖」を適切性条件とする科学の存在様態が、あるテクノロジーの効率性  
21 や客観的データを提示したとする。これに対し、道徳の存在様態は、そのテクノ  
22 ロジーが私たちの共同体や環境に対する「分かちがたい結びつき」を損なうのでは  
23 ないか、それは「悪い結びつき」をもたらすのではないか、と問い返す。こうして、  
24 それぞれの「適切性条件」に従って自らの主張を展開し、互いの論理を尊重しなが  
25 ら、新たな共存、すなわち、科学的でありかつ道徳的でもある新たなハイブリッド  
26 を構成していく。

27 ▶ この議論は、プーチ・デラベヤカーサの非規範的な倫理と共鳴しているように思わ  
28 れる。他方で、プーチ・デラベヤカーサの議論は、道徳の存在様態の適切性条件を  
29 他の存在様態に当てはめてしまう危険性をはらんでいるようにも見える。

30 ▶ しかし、ケアは、さまざまな存在様態とその交渉を支える条件ではないか。

31 ☆ **存在様態の条件としてのケア①** それぞれの存在様態の適切性条件は、さまざ  
32 まなケアの網の目によって成り立っている——実験室の清掃や器具のメンテ  
33 ナンス、研究者の生活保障、研究対象への愛……。適切性条件に取って代わる  
34 ものではない。

35 ☆ **存在様態の条件としてのケア②** ラトゥールの「外交」は、異なる様態間の衝  
36 突を避けるための手続き的な要請であるが、いかにして支配的な存在様態が  
37 そうでない存在様態と交渉しようとするのか。そこで、本書は、存在様態間  
38 の相互依存の関係性に着目させ、交渉を倫理政治的に行うためのエートスと  
39 してのケアを明らかにしている

40 ✓ 土壌科学における相互交渉の例

41

## 1 訳稿検討会のメンバー募集！

2 本報告で取り上げた『ケアを呼ぶもの (Matters of Care)』は、現在、2025 年度中にナカニ  
3 シヤ出版さんからの刊行を目指し、日本語への翻訳を進めています。本書は、ANT、フェミ  
4 ニズム科学論、ケア論、環境人文学など、極めて多岐にわたる分野を横断する重要な著作で  
5 す。そのため、多くの読者に届く開かれた訳文を創り上げるためには、専門分野の垣根を越  
6 えた多様な視点からの検討が不可欠です。

7 そこで、訳稿をともに検討いただけるメンバーを募集します。さまざまな分断が深まるば  
8 かりの今日、本書は、綺麗事だけの理想主義にも無責任な相対主義にも逃げることなく、モ  
9 アザンヒューマンの世界に物質的な義務をもたらす非規範的で脱主体的な倫理と「関わり  
10 あおう」とします。この重要な著作を日本の読者に届けることに関心のある方の参加をお待  
11 ちしています。なお、恐れ入りますが、参加いただく際には以下の3点をご確認ください。  
12 ①守秘義務を遵守頂けること、②少なくとも訳稿ファイルを通読頂けること、③最終的な編  
13 集権が訳者と出版社と原著者にあることを認めて頂けること。

### 14 【概要】

- 15 ● 形式: 事前に訳稿を共有。メールや Zoom による 1 対 1 のやりとりを基本として、やり  
16 とりの内容をメーリングリストや Google Drive 等で随時共有することで、集合的に議  
17 論を深めていきます。できれば、対面での検討会も企画したいです。
- 18 ● 期間: 2025 年 7 月～2026 年 2 月。
- 19 ● 御礼の方法: あとがきに明記。献本。私も論文草稿等の下読みをします。

### 20 【とくに歓迎する方】

- 21 ● 科学社会学、STS、ANT、フェミニズム、ケア論、環境人文学、哲学・倫理学等の分野  
22 を専門とする研究者、大学院生の方。
- 23 ● 原書と丁寧に付き合わせて日本語翻訳の質について議論することに関心のある方。
- 24 ● 所属や専門分野を問わず、本書の議論に強い関心（あるいは「内なる異論」）を持ち、  
25 読者の視点から積極的に意見交換に参加して下さる方。

### 26 【参加方法】

27 ご参加いただける方は、伊藤（[ito@human.niigata-u.ac.jp](mailto:ito@human.niigata-u.ac.jp)）まで、①ご氏名、②ご所属、③  
28 ご専門・関心領域、④メールアドレス（google アカウントとして登録されているアドレス←  
29 よく分からない方は気にしないでください）を明記の上、ご連絡ください。締切は、2025 年  
30 7 月 6 日（日）です。